

令和 7 年 2 月 13 日

第 2 回文京区子ども読書活動
推進計画策定検討委員会

文京区教育委員会

文京区子ども読書活動推進計画策定検討委員会会議録

令和 7 年 第 2 回

日時：令和 7 年 2 月 13 日（火）午後 6 時 00 分

場所：区議会第 2 委員会室

「出席」

委員	長谷川 幸代
委員	東 田 晃 拓
委員	今 井 もなみ
委員	大 坪 沙友里
委員	石 倉 知 直
委員	石 田 廣 行
委員	小 木 貢
委員	三 井 躍 子
委員	小 池 夏 子
委員	小 池 拓 哉
委員	吉 羽 優 子
委員	植 竹 純 子
幹事	吉 田 雄 大
幹事	中 川 景 司
幹事	山 岸 健
幹事	鈴 木 大 助
幹事	猪 岡 君 彦
幹事	奥 田 光 広

「事務局」

真砂中央図書館	鈴木 佐千子
真砂中央図書館	大導寺 文 子
真砂中央図書館	平 光 茜
真砂中央図書館	大 瀧 美 穂

文京区子ども読書活動推進計画策定検討委員会会議録 次第

日時：令和7年2月13日（火）午後6時00分から

会場：区議会第2委員会室

開会（18時00分）

1 開会

2 議題

（1）アンケート調査結果について

（2）次期子ども読書活動推進計画の方向性について

3 その他

4 閉会

閉会（19時55分）

配付資料

【資料第1号】 子どもの読書活動に関するアンケート調査結果（児童・生徒）

【資料第1－2号】 子どもの読書活動に関するアンケート調査結果（児童・生徒）

【資料第2号】 子どもの読書活動に関するアンケート調査結果（保護者）

【資料第3号】 学校図書館支援業務に関するアンケート調査結果

【資料第4号】 次期子ども読書活動推進計画の方向性について

【資料第5号】 検討課題一覧

【資料第6号】 「文京区子ども読書活動推進計画」進捗状況調査結果（令和5年度実績）

委員会開会

(18:00)

○長谷川委員長 それでは、次第に沿って進行してまいります。よろしくお願いいたします。

まず、議題1、子どもの読書活動に関するアンケート調査結果と学校図書館支援業務に関するアンケート調査結果について、説明をお願いします。

○猪岡幹事 それでは、私、真砂中央図書館長、猪岡と申します。私のほうからご説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

最初に、皆様、資料第1号と資料第1-2号、この二つをお手元にご用意ください。

まず、資料第1号のほうをご覧くださいと、「子どもの読書活動に関するアンケート調査結果(児童・生徒)」とございます。調査を行いました日にちといたしまして、令和6年11月に実施をしております。アンケート回答数のところに書いてございますが、小学3年生、小学5年生、中学2年生、高校2年生を対象として実施をしております。今回から高校2年生を初めて調査対象として加えて実施したところでございます。

それでは、順次内容についてご説明をさせていただきます。

まず、1ページ目になります。項番の1、「この1か月間に何を読んだか」というところの調査の結果になります。今回初めて、何を読んだか、図鑑・百科事典を読んだのか、あるいはまんがを読んだのか、雑誌を読んだのか、そういったところを細分化して調査を取ったところでございます。

ご覧になっていただきますと、学年が上がるにつれて、「学習参考書」の割合、ここで見ますと黄色の部分の割合が増えていると、そういった結果となっております。

また小学生、中学生は、一番左側、「本」の割合が最も高くなっておりますが、高校2年生におきましては、「まんが」の割合が多くなっているというところでございます。

「まんが」については、比較的どの年代においても高いという、そういった結果となっております。

続いて、一旦、資料1-2号のほうをご覧ください。補足資料となっております。

A4横の資料1-2号をご覧くださいと、こちらと同じ「この1か月間に何を読んだか」というところになってございますが、こちらは、実際に読んだ児童数を分母といたしまして、その割合ということで出しております。例えば、小学3年生のところを見ていただきますと、「本」というところが、1,459名の方が読んだという結果になっております。割合でいくと85.3%の子どもたちが「本」を読んでいると。下にずっと見ていただき

ますと「図鑑・百科事典」については48.1%、「辞書」については26.8%と、そういった形でご覧になっていただくような資料となっております。

いずれの学年も見ていただきますと、No. 1の「本」の割合が高いのと、No. 5の「まんが」の割合が高いというところが見てご覧になれるかと思っております。

また、2番の「図鑑・百科事典」につきましては、学年が低いほど高くなっております。

また、4番の「学習参考書」につきましては、学年が上がるほど高いということで、学年が低い頃は図鑑・百科事典を読んでいたものが、学年が上がるにつれて、学習参考書を読む方が増えてきていると、そういった傾向になっているのかなと思います。

また、7番の「新聞」のところをご覧になっていただきますと、比較的、小学生、3年生だとか5年生の割合が高くなっておりますが、中学生、高校生となるにつれて、新聞の読んでいる割合が低くなっていると、そういった傾向になっているところでございます。

その下、参考と書いてありますが、「この1か月間に本を読んだか」、「はい」、「いいえ」という形で表になったものがございます。表の下側に注釈がありますが、3段のうち、上段が今回の調査結果、中段が前回、令和2年10月に行った調査結果、下段が前々回、平成27年5月に行った調査結果となっております。

また、今回につきましては、項番1の設問について、「本」または「図鑑・百科事典」を選択した回答を「はい」という形で整理をさせていただいております。それを前提といたしまして、小学3年生を見ていただきますと、90.1%が本を読んだ「はい」に該当いたしまして、9.9%が「いいえ」となっております。

小学5年生のところを見ていただきますと、85.9%が「はい」、14.1%が「いいえ」、中学2年生は85.6%が「はい」、14.4%が「いいえ」、高校2年生になりますと52.1%が「はい」、47.9%が「いいえ」という形となっております。

続きまして、資料1号のほうにお戻りください。資料1号の3ページをご覧ください。

項番の1-2、「スマートフォンやタブレット、パソコンを使って読んだものはありますか」という設問になっております。こちらも学年が上がるにつれて、それぞれ増えているところとなっております。中学2年生や高校2年生におきましては、過半数の生徒が使用したということで、「はい」と回答されております。

続きまして、その下、項番の1-3になります。1か月に読んだ冊数について、回答を集計したものとなっております。小学3年生と、小学5年生につきましては、前回と比べまして微減となっております。括弧書きが前回になっておりますので、それぞれ若干減ったとい

う形となっております。

中学2年生を見ていただきますと、前回から増えまして、約3倍というような形の結果となっております。

また、高校2年生のところも初めて今回は調査をいたしましたが、3.8冊というところで結果が出たところでございます。

国のほうでも令和4年度に全国的な調査を行っておりますが、そちらの調査結果でいきますと、小学生が13.2冊、中学生が4.7冊、高校生が1.6冊ということで、小学生は若干下回る結果となっておりますが、中学校、高校においては国を上回る数値となっているところの分析がなされます。

続いて、4ページをご覧ください。項番1－4となります。項番1－2と比較いたしますと、本、図鑑・百科事典に限定した場合において、「スマートフォン、タブレットを使ったものがありますか」というものになりますが、本、図鑑・百科事典に限定した場合におきましては、若干スマートフォンやタブレット、PCの利用傾向は減っていると。先ほどの1－2と比べて減っているというような形の結果となっております。

その下、項番2、「読書が好きか」どうかというところになります。こちら前回とそれぞれ比較が書かれておりますが、前回と比べまして、いずれの学年におきましても、「好き」と「どちらかといえば好き」を合計した割合が減ったというような形の回答となっております。

高校生につきましては、今回初めて行ったところになっておりますが、「好き」と「どちらかといえば好き」を合わせますと、中学生を上回るような形での結果となっているところでございます。

5ページをご覧ください。項番の3になります。「読書をするのはなぜか」というところになっております。いずれの学年におきましても、「おもしろい・楽しい」というのが最も多く割合を占めております。次いで、「好きなこと・興味のあることをもっと知るため」というのが2番手になっているところでございます。また、「家族や先生、友達からすすめられた」という理由は比較的少なくなっておりまして、傾向といたしましては、自ら本を選び、読んでいる傾向だということが伺えております。

続きまして、9ページをご覧ください。項番の4、読書をする場所についての回答になります。いずれの学年におきましても、「自分の家」で読む割合が最も高くなっておりまして、小学生、中学生におきましては、「教室」が続いた形となっております。一番過ごす場所が

長い学校での読書というものが子どもたちの読書を推進する上で、重要な場所になっているというところが見てとれております。

また、高校生におきましては、自由意見の中で、「移動中」という回答をされた方も多くいらっしゃいまして、通学時間で読んでいるというところも一定数あるのかなというところも伺えるところでございます。

続いて、11 ページをご覧ください。項番の5になります。「読書をしない理由」についての項目になります。小学3年生のところを見ていただきますと、「外あそび、スポーツの方が好き」というこのオレンジ部分が一番割合が高くなっております。

小学5年生、中学生、高校生を見ていただきますと、「テレビやゲームの方が好き」という、ここである灰色の割合のところが高いというようなところが結果として出ております。

また、一番左の「読書がきらい」という回答におきましては、小学3年生は低い数字が出ておりますが、小学5年生、中学2年生では、若干高くなっているというところが傾向として出ているところです。ちょっとここも予想にはなってしまうんですが、高学年から、読み物が難しくなることや、1冊のページ数が多くなってしまうことも若干影響しているのかなというところもあるのかなと思っております。

また、「勉強する、塾、習い事へ行く」は、高校生が高く、次いで小学5年生も比較的高い割合となっております。

また、「放課後活動やクラブ活動のため」というところの項目につきましても、中学校、高校では一定割合が高いという、そういった結果となっております。

また、「読みたい本がない」というような回答のところも割合が高くなっております、高校生におきましては、特に割合が高く、17.8%という形で、「読みたい本がない」というところの回答が高い割合となっております。

続いて、12 ページをご覧ください。項番の5-2になります。「読書がきらいな理由」という調査項目となっております。比較的回答としては割れているところになりますが、小学3年生を見ていただきますと、「読むのに時間がかかる」というところの、ここであるオレンジ色の部分、そこが高くなっております。

また、小学5年生、中学生、高校生においては、「読むのがめんどくさい」という回答、青色の部分の回答が高くなっていると、そういった傾向が出ております。

また、「読んでもおもしろくない」というところも、回答として割合が高くなっているところでございます。

続いて、13 ページをご覧ください。項番の6番になります。学校図書館や学級文庫の利用についての調査項目となっております。小学3年生のところを見ていただきますと、週に1回以上ご利用されている児童が過半数を超えているというところが結果として出ております。ただ、学年が上がるにつれて、かなり低くなってきているということです。学年が上がるにつれ、逆に「利用していない」、ここでいう緑色の部分の割合が顕著に高くなっていると、そういった傾向となっております。

続いて、14 ページをご覧ください。項番の7、区立図書館の利用状況についての調査項目となっております。こちらも学年が上がるにつれまして、利用状況が減っておりまして、高校生に至りましては、8割近くが利用していないと、そういった状況となっております。都立高校につきましては、区外から通われている生徒もいますので、通学経路にない図書館については、利用につながっていない、そういったところもあるのかなと分析しているところでございます。

続いて、その下、項番8、「どんな図書館がよいと思うか」というところになっております。こちらは、「自分が読みたい本がある」ここでいうねずみ色の部分が、いずれの学年でも高い数値となっております。「自分が読みたい本」というのはどういった本かなというところで、自由意見のほうも見てみますと、小学生につきましては、まんがをご希望される子どもが多いのかなということで、ご回答がかなりあります。

また、「勉強できる席がある」という回答も、学年が上がるにつれて多くなっておりまして、高校生におきましては、29.0%と書いてあるところになりますが、高校生では最も高い割合となっております。

また、「本がたくさんある」だとか、「居心地がよい」、ここでいう一番左側の青色の部分、右側にあります茶色の部分の割合も、それぞれの年代で比較的高い割合となっているところでございます。

児童・生徒につきましてのアンケート結果は、以上となります。

続きまして、資料第2号のほうをお手元にご用意ください。資料第2号につきましては、幼稚園、保育園の保護者の皆様へ取ったアンケートとなっております。

1 ページ目、項番の2番のほうを見ていただきますと、「図書館をどれくらい利用するか」というところになります。前回と今回におきまして、回答項目の若干の変更はございますが、過半数以上の方が月に1回以上は利用していると、そういった傾向となっております。

逆に、「利用したことがない」と回答をする方については、1割程度というのが傾向とし

て前回は、今回も出ているところがございます。

続いて、2ページをご覧ください。項番2-2になります。「利用したことがない」と答えた人に対して、その理由を問う設問となっております。こちらは、「時間がない」ということで回答いただいた方が過半数近くあった結果となっております。

続いて、3ページをご覧ください。項番3、図書館の行事への参加についての設問になります。こちらにつきましては、「参加したことがない」という回答の方が過半数を超えた結果となっております。

項番3-2、参加しない方の理由について聞いたものになっております。「曜日や時間が合わない」といった割合が、前回は、今回も割合が高くなっております。

また、自由意見の中におきましては、発達障害があり、騒いでしまうというものもあり、お子様が騒いでしまう可能性や、子どもがじっと聞いていられなさそうなど、子どもの発達を理由としたものもいくつかあるといったところがございます。

4ページをご覧ください。項番の4番になります。家庭にある絵本の冊数について聞いたものとなっております。前回と今回、比較で書いてございますが、前回同様「51冊以上」が4割を超えておまして、各家庭でお持ちの絵本の数は高い水準だということが見てとれております。

続きまして、5ページをご覧ください。項番の5番、本の入手方法についての設問になっております。こちらは、3割の方が「書店で買う」ということで、回答をされております。

次いで、「図書館で借りる」というのが22.4%、次いで、「通信販売・ネットで買う」というのが21.2%というところで続いております。自由意見を見ていただきますと、プレゼントとしてもらうケースもかなり多いのかなというところが意見の中で見てとれます。

続きまして、6ページ、項番6になります。絵本の選び方についての設問となっております。こちら「親が良いと思った本を選ぶ」というのが32.3%と最も高い値となっておりますが、次いであります「子どもが手に取った本を選ぶ」というのも29.1%と比較的高い数値となっております。

また、「インターネットやSNSで評判の本を選ぶ」や「図書館のブックリストを参考にして選ぶ」というのもありまして、誰かに、人に相談してというよりも、おすすめされる本を選ぶという、そういった傾向も見えて伺えるところがございます。

7ページをご覧ください。項番の7、家庭での読み聞かせになります。こちらは6割近くの方が「ほぼ毎日している」と回答しております。逆に、6%の方が「ほとんどしていない」

ということで回答されたというところになっております。

続きまして、項番の7-2に、ほとんどしない方の理由といたしまして、「時間がない」といったところの回答が最も多いという形の結果となっております。

続きまして、8ページをご覧ください。項番の8、「読み聞かせに電子書籍を利用したことがあるか」というところになりまして、こちらも「利用したことはない」という割合がかなり高くなっております。

その下、項番の9は電子書籍ではなくて、読み聞かせ動画やデジタル絵本、そういったものを利用したことがあるかという設問になりますが、こちらは70.8%、約7割の方が「利用したことはない」というようなところ。「利用したことはない」は、項番8と項番9のいずれも高い割合となっておりますが、読み聞かせ動画のほうが若干利用者の方が多いのかなというところで結果が出ております。

項番の10番、「読み聞かせは子どもの成長に役立つと思うか」というところになりますが、前回同様、多くの保護者の皆様が役立つと回答されたところとなっております。

続きまして、9ページをご覧ください。項番の11番、保護者の読書量、どれくらい本を読むかというところになっております。「時々読む」という方が最も割合が高くなっております。「読まない」方の理由を見ますと、時間がないというのが、一定程度大きな理由になっているのかなというところが見てとれるところでございます。

続いて、11ページは、お子様の好きな本上位10タイトルというところで書いてありますが、こちらはご覧のとおりとなっております。

続きまして、その下にあります13番、今後、図書館への希望というところでの回答の内容になっております。自由意見のほうを見ていただきますと、新刊本や人気の本を増やしてほしいという、そういったご意見が多いのかなと見てとれます。

また、施設に関するご希望の意見、例えば、子どものスペースを充実してほしい、静かにしなくていい空間を作してほしいとか、そういった施設に対する要望も比較的多いところとなっております。

また、サービスについての意見、例えば、保育園や幼稚園の貸出しを充実してほしい、貸出場所、返却場所を充実してほしい、そういったところのご意見だとか、行事についてのご意見、こちらはイベントを増やしてほしい、そういった需要のご意見があるところでございます。

保護者のアンケート結果につきましては、以上となります。

続きまして、資料第3号をご覧ください。資料第3号、「学校図書館支援業務に関するアンケート調査」となります。こちら1ページ目に書いてございますが、区内の小・中学校の先生たちを対象に行っております。令和6年の10月から11月にかけて行ったところでございます。

学校図書館支援員といったものがどういったものかといいますと、文京区のほうで、平成23年度から開始をいたしまして、当初は小学校7校、中学校5校に対して、月2回、図書館から各学校に図書館支援員という形で、司書の資格を持った方を派遣をしているところでございます。平成23年度は小学校7校、中学校5校という形でしたが、平成27年度からは拡大をいたしまして、全30校で行っております。週4日、1日4時間という形で図書館から派遣を行っているところでございます。

それに対するアンケートを取ったというのが、こちらの調査となっております。

こちら、5ページのほうをご覧ください。

5ページのQ18ということで、学校が学校図書館支援員に、今後も期待したい支援はどのようなものですか、というような項目となっております。学校側が特に、派遣支援員に期待しているものとして挙げているものは、「調べ学習・レファレンス等の授業支援」で、こういった先生たちへの支援というところが最も高くとなっております。次いで「蔵書や図書データの整理」、「利用しやすい図書の配列」、「読み聞かせ・ブックトークの実施」、そういったものが続いているところでございます。

続きまして、6ページをご覧ください。Q20にあります「支援業務の希望回数」ということで、先ほどご説明しました現在は、週4日派遣をしておりますが、これに対して学校側がどれくらい希望しているかというところになっております。支援ニーズについては、現在の週4日と回答されている学校が12校、週5日以上が17校ということで、比較的学校としては支援員の業務に対して期待をしていると、さらに拡充というところを期待していると、そういった結果が出ているところでございます。

その下、Q21にあります「支援業務の希望時間数」についての調査項目となっております。現在は1日当たり4時間に対しまして、各校どれくらい希望するかというところになっております。現在の1日当たり4時間を希望する学校が18校で、1日5時間以上、さらに拡充を望む学校が12校とそういった結果となっております。

アンケート調査についての説明は、以上になります。

○長谷川委員長　ご説明ありがとうございました。

それでは、ただいまの説明について、ご質問などがございましたら挙手をお願いいたします。

お願いします。

○大坪委員 認可保育園父母連の大坪です。よろしくお願いします。

アンケートの集計ありがとうございました。2点ほどお伺いしたい点があるんですが、まず、資料第1号と、あと第2号で、アンケートの回答数を記載していただいていると思うんですが、回答率はどれぐらいだったのかというところと、その回答率は、期待していた数字と比べて高かったか、低かったか。もし低かったようであれば、何か要因だったり対策をお考えのものがあれば、お聞きしたいですというのが1点です。

2点目は、資料1－2号の下段に、1か月に本を読みましたかというところで、各学年ごとに今回の結果と前回、前々回で並べていただいていると思うんですが、小学校3年生と5年生は下がっている中、中学校2年生だけ上がっているかなと思います。中学校2年生に関しては、冊数も前回の1.7から5.9で結構伸びているかなというところがあって、伸びていること自体はいいと思うんですけど、ここも何か考え得る仮説があるのか。

一方で、資料1号の4ページ目に書いてある、本を読むことは好きですかというそこに関してはちょっと減っているんですね。そこが減っているけれども、読んだ冊数が伸びているというところが、何か、どういうふうに捉えられているのか、もしあればお聞かせください。

○猪岡幹事 まず、最初の質問になります。回答率というところになりますが、まず、小学3年生と小学5年生、中学2年生については、各学校のほうで配布をして回収をさせていただいておりますので、100%ということでお考えいただければと思います。ですので、小学3年生、小学5年生、中学2年生につきましては、全て回収したという形になっております。高校2年生のところにつきましては、各学校のほうからご案内をいただいたという形になっております。都立高校のほうを対象にして行いまして、回答いただいたというところになっておりまして、実際、何人の方に配ったかという具体的な数字というところが把握できてはいたのですが、もともと昨年度、対象の規模の人数がどれくらいいるかということで、こちらで把握した人数が945人という人数です。調査する前に大体どれくらいの高校生が対象になるだろうということで、時点で把握したのが945人いまして、それを分母として計算をいたしますと、28%という結果となっております。

見込みとして、この見込みが低かったか、高かったというところですが、大体3割ぐらい、

これぐらいのかなと予想していたところです。というのが、今回はQRコードで回答いただいたということで、任意で行っておりますので、ご回答いただける方というのは一定数になってしまうのかなと見込んだところでございます。

もう一つ、保護者を対象にしたところにおきましても、幼稚園と保育園の保護者を分母にしまして、回答数を割り返しますと、37.4%という形で、こちらは比較的高い形での回答が得られたのかなと思っております。高校生に対しては今回初めて調査を行ったところですが、高校生の子たちから回答を取っていくというのがなかなか難しかったのかなというのが正直な結果になっております。

また、今回、本を読んだかどうかというところで、冊数も含めて、中学生が増えている傾向になっているというところが、中学校の取組の中で、朝読書とか、そういったものが影響しているのかなと思っております。前回、若干低く出過ぎているのかなというのが私も調査する前から思っていたところでして、朝読書が、それも調査対象になるというところもしっかり今回はアンケートの中にも記載をいたしましたし、実際個々の中学校でもそういった取組をやっていたいただいたというところが、こういった高い数字になっているのかなと思っております。

ただ、やはり先ほどのご指摘のとおり、本が好きか、嫌いかというところでは、微減、減っている傾向にありますので、そこでいかに子どもたちにもっと本を好んでもらえるかというところは、我々もまた考えていかなければいけない課題かなと思っております。

○大坪委員 朝読書のところは、取組としては過去からあったけれども、今回のアンケートでそれも入りますよというのを明記したので、ということですかね。

○猪岡幹事 そうですね、両方あるかなと思っております。前回明記していなかったのを今回、朝読書も対象になるということで、しっかりとそれが伝わった形で回答がされたというところと、中学校のほうでも続けてそういった朝読書の活動をやってきたというところも、一定貢献しているのかなと分析をしております。

○長谷川委員長 よろしいでしょうか。

○大坪委員 はい。ありがとうございます。

○長谷川委員長 では、ほかにありましたらお願いします。

お願いします。

○石倉委員 福音館書店の石倉と申します。よろしくお願いいたします。

児童・生徒のアンケートの14ページ、8番になるんですけれども、そちらの回答項目の

中に、「新しい本がある」というものがあります。この新しい本という言葉の表現は二つ取れるんじゃないかなと感じました。一つは、新刊の本というところになると思うんですけど、もう一つはやっぱり図書館という場所で考えると、古くなって傷んだ本の対極としての新しい本というところで両方取れるかなと思いましたので、正しい意味合いでの回答を期待するとすれば、別の聞き方があるのかもしれないと思いました。

関連してですけれども、ここを新刊の本と受け止めた場合に、子どもたち、小学3年生、5年生、中2、高2、いずれのところでも「新しい本がある」という選択を選んでいる割合は、それほど大きくないというのが印象としてあったんですが、一方で、保護者のアンケートの11ページの13番、「今後、図書館に希望すること」の具体的な回答のところを見えますと、「新刊本を増やしてほしい」という声が非常に多くなっているんです。児童・生徒の回答と保護者の回答に、大きな開きがあるところが非常に興味深く感じました。また、どちらに軸足を置くかによってもかなり、今後の方針に影響してくるなと思ったので、まず、先ほどの回答項目の選択肢の表現の部分で検討の余地があるかをお聞きしたいというところと、もう一つ子どもたちの回答と保護者の回答の開きについて、何か見解をお持ちでしたらお聞きしたいなと思いました。

○長谷川委員長　お願いします。

○猪岡幹事　ありがとうございます。まず、1点目のご指摘のところにつきましては、今回は、既に調査をこういった形で行っているところでございますので、そういったご指摘のところを踏まえながら、また、次回の参考にさせていただければと思います。

確かに、ご指摘のとおり「新しい本がある」といったときに、新刊を求めているのか、文京区の図書館、老朽化している図書館が多いということと、本も古いというようなご指摘もいただいているところですので、借りる本があまり傷んでいない本を望んでいると、そういったご意見も多いのかなと思っております。

次回、そういったところも踏まえながら、項目は考えていければと思っております。

また、保護者との見解の差、考え方の違いが出ているかどうかということになっております。保護者のところでいきますと、新刊本を欲しいというところは、利用者の中からもお声はいただいているところでございます。図書館の利用者の中には、そういった新刊本を期待しながら、いつも借りたいんだけど、それが予約されていて、なかなか借りられないというお声はよく聞いています。特に、ベストセラーとかになりますと、図書館のほうで入れても、予約が一気についてしまって、書棚に並ばないというような状況がしばらく続いてしま

うといったところから、もしかして保護者の方々は、自分たちが読みたいという本がいつも図書館に並んでいないというところをよく見られているので、こういった回答が多くなっているのかなと、そういったところも分析しているところでございます。

○石倉委員 そうしますと、この保護者の方の図書館に希望することの部分に関しては、子どもが図書館で本を選ぶ上で、新刊本をとということではなく、親が自身の本を選ぶ際の目線もかなり入っているんじゃないかということになりますか。

○猪岡幹事 そうですね、どちらを選択しているかというのは、この回答からはなかなか分からないところなんですけど、もしかして感覚としては区立図書館のほうには、そういった新刊本があまり書棚に並んでいないというイメージの中から、それを書いていらっしゃる場合もあるのかなと思っております。

○石倉委員 ありがとうございます。

○長谷川委員長 図書関連は、副本をどうするかという問題は、結構いろんなところで話題になったり、問題になったりすると思うんです。新しい本をニーズに合わせてそろえると、ちょっとそれはそれでまた検討しないといけないというところが出てくると思うので、ちょっとじっくり考えてやっていただきたいと思います。

よろしいでしょうか。

○猪岡幹事 今の関連でいきますと、我々図書館のほうでも副本という形はやっておりまして、予約の件数によって、副本を最大30冊まで入れるような形を取っております。そういった形で、副本は入れているんですが、例えば、本屋大賞を取られたものとかになるとそれ以上に、この間私が見たのだと、900件とか予約がついてしまうと、なかなか借りるまでの期間というのが空いてしまうといったのが状況になっているのかなと思っております。

○長谷川委員長 では、続いてお願いします。

○小木委員 小木と申します。資料1号の14ページ、15ページの辺りの「どんな図書館がよいと思うか」の設問についてです。先ほどご説明いただいたときには、勉強できる席があるという回答が結構多いというようなご説明があったと思うんですが、その他を選択した回答という15ページの辺りとか、ずっと見ていきますと、確かに静かな勉強できるスペースとか、ゆっくり本を読めるとかというの多いんですが、お友達とみんなと仲よくやれるとか、しゃべれる席がとか、食事が取れるとかということでも、学年が上がるごとにそういう回答がちょっと多くなっているのかなというの我也思います。なので、静かに確かに本を読みたいけれども、友達と一緒にちょっとお話ししたりするような、サードプレイスのような場所

として機能している可能性も結構あるのかなと。現状どれくらい、それが図書館で可能なのかなというところもちっと気になったので、「居心地のよさ」という回答には、そういった意味合いも含まれているのではないかなと、そこも考えていきたいなというふうにちょっとアンケート結果から感じました。

その辺り何か、お考えのことがあればお聞かせください。

○猪岡幹事 ありがとうございます。今ご指摘いただいたところは、これから施設改修を様々、図書館のほうで行っていくんですが、そういったときにアンケートを取ると、必ず出てくるご意見になっております。中高生の中でいきますと、グループ学習という形で、生徒が集まって、みんなで勉強したいというニーズがあつたりもしますので、そういった部屋を今後の施設改修においては、我々も設えていくような必要性があるのかなと思っております。

現状の図書館でそういった場所が確保できているかというのと、そういったグループ学習をする場所とかというのができてなくて、図書館ですとYAコーナー、ヤングアダルトコーナーというのが各図書館にあり、そういったところで中高生の居場所的な形にはなっているんですが、しっかりグループ学習ができるような形で分けられているかというのと、そこまでは至っていないという現状でございます。

これからの施設整備では、そういった視点を我々も持ちながら、改修の中に盛り込んでいければなと思っております。

最近の図書館、ほかの自治体の図書館とか見てまいますと、静と動という形で分かれているようなところがありまして、静かに本を読みたい方もいれば、動という形で、いくらかおしゃべりをできる空間が欲しいというようなご意見もいただきますので、静と動を分けたゾーニングをしながら、図書館づくりをしていくというのも一つ大きな視点なのかなと思っているところでございます。

○小木委員 ありがとうございます。最近、みんなネットでも、わざわざオンラインでつないで一緒に勉強したりすると思うんですね。なので、うるさくしゃべりたいというよりは、友達と一緒に勉強したいというのも本当にあるのかなと思うので、それであれば図書館でも可能なかなというふうに思いますので、ぜひご検討いただけたらと思います。

○長谷川委員長 ありがとうございます。グループでの学習とかということは、今回は子どもの読書の計画ですけれども、生涯学習として、大人からのニーズも高いと思いますので、そういう交流ができるというところの視点をぜひ大事にいただけたらと思います。

では、続いていかがでしょうか。

私のほうからちょっと1点、気になった点がありまして伺いたいですけれども、複数回答のグラフなんですけど、複数回答なので、このグラフだと、もしかして100%が回答者の人数ではないのではないかなというふうに思ったのですが。

○東田委員 いや、二つの単体でお子さんだけを見ていくのだったら分かるんですけど、それを中2と高2という意味ではおかしい。例えば、1ページをご覧くださいと、高2のところの「まんが」が好きというのは28.5%で、一方で中2の「まんが」が好きというのは23.5%で、高2のほうが多く、この比較表だとそういう印象を与えるんですけど、横紙のほうを見ると、高2の「まんが」を選んでいる62.9%、中学2年生は63.6%ですから、明らかに中学2年生のほうが、「まんが」を読みたいというふうになるため、この回答はちょっとおかしい。

○猪岡幹事 ご指摘ありがとうございます。資料1－2号がまさにそういったところから作った資料になっておりまして、もともとこのお配りした資料1号のほうは、全体に占める割合傾向という形でご覧になっていただくものになっておりまして、資料1－2号のほうが多数回答の場合での集計かなと思っております。

今回、速報という形で出させていただいておりますので、また計画をまとめる際にその点も踏まえながら整理してまいりたいと思います。

○長谷川委員長 ありがとうございます。では、一般向けに公開するようなときに改めてということで、よろしいでしょうか。

ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

(なし)

○長谷川委員長 特にないようでしたら、進みたいと思いますけれども、事務局などから、何か補足等は大丈夫ですか。

(なし)

○長谷川委員長 それでは、特にないようでしたら、議題の2のほうに進んでまいりたいと思います。

それでは、議題の2の次期子ども読書活動推進計画の方向性について、提案をお願いいたします。

○猪岡幹事 それでは、資料第5号と資料第6号をお手元にご用意ください。

まず、全体の方向性をご説明する前に、これまでの計画についてのご説明をさせていただきます。

ければと思います。資料第 5 号のほうをご覧ください。

第 5 号のほうを見ていただきますと、現在の計画が一覧表になったものでございます。一番左の列のところにありますが、現行計画に掲げる目標となっております。現行計画四つの目標がございますので、その四つの目標が掲げてございます。「発達段階に応じた読書機会の提供」、「家庭・地域・学校・関係機関における子どもの読書環境の整備と読書活動の充実」、裏面に行きまして、「子どもの読書活動の意義や大切さの普及・啓発」、「地域団体との協働による子どもの読書活動の活性化」ということで現行四つの活動を掲げて行ったところでございます。

その表を右のほうに進んでいただきますと、真ん中ほどに「現況」と書いてある列がございます。「現況」と書いてあるのは、令和 5 年度の実績値を書いてございます。

それでは、順にご説明をさせていただきます。

まず、目標 1 のところになります。「発達段階に応じた読書機会の提供」という目標を掲げておりまして、項番の 1 番と 2 番につきましては、定期検診や図書館行事の機会を捉えまして、乳幼児から絵本に触れるための取組ということで、それぞれ内容と目標が掲げられております。

項番の 3 番、4 番、5 番につきましては、乳幼児期から学齢期までのそれぞれの成長段階に合わせた読み聞かせや行事などの取組について書いてございます。

項番の 6 番につきましては、それぞれの成長段階に合わせたブックリスト、おすすめの本を紹介する取組となっております。

項番の 7 番は中高生に向けたサービスの取組ということで記載をしてございます。

その下、目標の 2 番になります。「家庭・地域・学校・関係機関における子どもの読書環境の整備と読書活動の充実」こういった目標を掲げておりまして、項番の 8 番、9 番、10 番は図書館、小・中学校、幼稚園、保育園、児童館が連携した読書環境の整備に向けた取組をそれぞれ記載しております。

項番の 11 番、12 番、13 番は特別な支援や配慮を必要とする子どもたちに対する図書館や学校での取組についての事業となっております。

項番の 14 番は電子書籍の充実に向けた取組、項番の 15 番は入院中の子どもへのサービスの充実に向けた取組、項番の 16 番から 21 番は小・中学校における読書環境の整備に向けた取組、裏面に行きまして、項番の 22 番は図書館と高等学校との連携に向けた取組ということで、それぞれ図書館や、あるいは小・中学校、幼稚園、保育園、児童館、高等学校、

そういったところが連携しながら子どもたちの読書環境の充実というのを目指していこうと、そういった目標となっております。

その下、目標の3、「子どもの読書活動の意義や大切さの普及・啓発」こちらを目標として掲げまして、項番の23番から26番は保護者や子どもへの啓発に係る取組、項番の27番は子どもたちが安心して過ごせる場所となるための取組、項番の28番はホームページの充実、項番の29番は計画の推進に向けた取組というところで、子どもや保護者、それに関わる保護者に読書活動の意義や大切さをしっかりと伝えていく、そういったところを目指した取組となっております。

その下、目標の4にいきますと、「地域団体との協働による子どもの読書活動の活性化」を目標として掲げまして、項番の30番、31番は子どもの読書を推進する図書館職員や小・中学校教員の資質の向上に向けた取組、項番の32番は大学生と連携した取組、項番の33番は区内の出版社や書店と連携した取組、項番の34番は区役所内の関係機関と連携した取組、項番の35番と36番は図書館や学校図書館におけるボランティアの育成、資質向上に向けた取組、項番の37番は様々な地域団体と連携した取組ということで、こちらは様々な地域団体に、いわゆる団体が協力しながら子どもたちの読書の活性化を図っていこうとそういったところを目指したものとなっております。

こちらが現行計画に掲げている目標と取組となっております。

それを踏まえまして、次期、こういった方向性にしていくかとお示しをしたものが次の資料となっております。

資料の第4号をご覧ください。「次期子ども読書活動推進計画の方向性について」ということで、右側の囲み書きに書いてありますが、現行計画からの変更箇所を赤字下線つきで表示しております。

「1 取組体系・具体的取組」ということで、「目標1 発達段階に応じた読書機会の提供」と、その下にあります「具体的取組」のNo. 1番から7番がございます。こちら7番のところに赤字で見え消ししまして、中高生世代という形に、直しております。現行、ヤングアダルトといった表現を使っております。それは、各図書館でもヤングアダルトという言葉を使っておりますが、その言葉に中高生にとってはなじみのない言葉なのかなということで、中高生世代という形で表現を変えております。

今後、図書館におきましても、そういった表現の言い方というのも一定考えていく必要があるのかなというところで記載をしております。

その下にあります、「次期計画の取組案」ということで二つ書いております。一つ目が、小学生への取組の拡充です。こちらは乳幼児期におきましては、かなり区においてもいろんな取組を行っております。例えば、ブックスタート事業だとか、それに続くフォローアップ事業、おはなし会だとか読み聞かせ、そういったところをかなり図書館でも行っているところになりますが、小学生に行きますと、小学校での対応というのが大きくなっていくというところで、我々図書館としても何か小学生にアプローチする取組ができないかという思いを込めまして、取組の拡充ということで記載をしております。

その下、中高生世代が本に対する興味・関心を持つための取組の充実というところになります。こちら先ほどのアンケート結果の中におきましても、高校生たちが読みたい本がないというようなご回答もあった中で、我々としてもどういった形で関心を持ってもらうか、そういったところを考えながら取組を充実していく必要があるのかなと思っております。括弧書きで例として、高校生用のブックリストの作成、イベントの参画等と書いてございますが、今、文京区のほうでは、小学生、中学生に対しておすすめする本ということで、ブックリストを作成しておりますが、それをさらに高校生まで広げた作成だとか、イベントの参画ということで、高校生たちにもイベントの企画から入ってもらう、そういったところで図書館に興味を持ってもらうと、そういった取組も考えられるのかなということで、例として記載をしております。

その下、「目標 2 多様な子どもたちへの読書機会の提供」ということで、こちら赤字となっておりますが、丸々新たに設定をしたというところでございます。

背景といたしましては、国のほうで令和 5 年度に子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画ということで、策定がされております。その中におきましても、掲げる柱の中に、多様な子どもたちの読書機会の確保という形で、3 本柱のうちの 하나가新たに国のほうでも定められたところがございます。

我々といたしましては、読書バリアフリー法の趣旨も踏まえながら、ここの部分を外出しするような形でしっかりと取り組んでいきたいということで、目標の 2 ということで新たに設定させていただいたところがございます。

「具体的取組」といたしましては、もともとありましたものをこちらに分類したというのが、No. 8 番、9 番、10 番、12 番。こちらは新たに作ったというわけではなくて、もともとあったものをこちらにカテゴライズさせていただいております。加えまして No. 11 は新たに追加をいたしまして、日本語を母語としない子どもへの読書活動の推進ということ

で、外国籍の子どもたちに対しても読書を楽しんでもらえる、そういった機会を考えていくというところも図書館として必要だと思っているところでございます。

次のページをご覧ください。2ページ目の一番上、「次期計画の取組案」ということで、こういった取組が考えられるかということで三つ掲げております。

一つ目が、アクセシブルな資料の充実ということで括弧書きといたしまして、「りんごの棚」の設置と書いてございます。こちら、りんごの棚といったものがこういったものか、米印で書いてありますが、スウェーデンの図書館サービスを参考に、誰もが読書を楽しめるアクセシブルな資料や読書補助具等をそろえた棚（場所）を設置する、そういった場所を各図書館の中で設えていく、そういったところが一つ取組として考えられるのかなと掲げたのが一つ目となっております。

二つ目、多読資料の充実・普及、こちら米印で、多読とは自分に合った本をできるだけ辞書を引かずにたくさん読み進めていく学習法ということで、先ほど日本語を母語としない子どもの読書活動の推進ということで、外国籍の子どもの中には、まだ日本語が十分ではないというような子どもたちもおりますので、こういった多読資料を充実することによって、そういった対応も考えていけるんじゃないかということで掲げた二つ目の取組案になっております。

三つ目ということで、外国語における行事の充実ということで、図書館としても何かそういった行事は考えていけないかということで考えたのが三つ目の取組となっております。

その下、こちらは変わらず、「目標3 家庭・地域・学校・関係機関における子どもの読書環境の整備と読書活動の充実」となっております。

先ほど目標2で、読書バリアフリー法等の新たな目標を設定しておりますので、この目標3からはその部分を削除するというので、見え消しをした部分となっております。

「具体的取組」のところも、番号がずれるということで、それぞれナンバーのところが変わるということで下線を引いております。

「次期計画の取組案」ということでこちら、五つ掲げております。

一つ目が、「デジタル社会に対応した読書環境の整備」に向けた取組ということで、この「デジタル社会に対応した読書環境の整備」が国の基本的な考え方のところで掲げられておりますので、それを文京区でも取組を進めていこうということで書いてございます。括弧書きで、こういったことが考えられるとして書いたものが、児童・生徒への電子書籍サービスID・パスワードの配布というところで書いてございます。

ほかの自治体で事例としてありますのが、電子書籍サービスのID・パスワードを全ての児童・生徒へ交付することによって、子どもたちのタブレットでそういった本が読めるといった取組をやっている自治体もございますので、文京区でそういった取組ができるかどうかということも今後の検討課題の一つかなということで書いてございます。

二つ目が、学校図書館における新聞の配置と活用ということで、そういったところも考えられるのかなということで二つ目になっております。

三つ目が、学校図書館への支援の充実に向けた取組ということで、先ほどご説明をさせていただきました学校へのアンケートの中で、学校図書館支援員に対するかなり期待のお声をいただいているといったところで、何か充実に向けた取組ができないかということで掲げたのが三つ目となっております。

四つ目、子どもと保護者が図書館を利用しやすい取組となっております。アンケートの中で先ほどご紹介をさせていただきました、子どもが図書館で騒いでしまって、図書館に行きづらいといった、そういったご意見もある中で、我々図書館といたしましても、子どもと保護者が利用しやすい取組、先ほど委員からもご意見がありましたが、静と動と空間を分けるだとか、そういった一定親子で過ごせる場所、環境をつくっていくということも何か考えていけないかということで掲げたのが四つ目となっております。

五つ目、高等学校との連携の強化ということで、高校生世代に対するアプローチが我々としても何かできないかということで、一番アプローチのしやすさというところで考えますと高等学校との連携をしっかりやっていって、そこから読書の推進につなげていくというのが一つ取組として考えられるのかなということで、こちら五つ目に取組案として掲げてございます。

次のページをご覧ください。「目標4 子どもの読書活動の意義や大切さの普及・啓発」。こちら目標と「具体的取組」は、これまでと変わりはありませんが、「次期計画の取組案」ということで二つ記載をしております。

一つ目が、多様な読書の機会の充実ということで、こちらもアンケートの結果の中で、なかなか時間が取れなくて行事に参加できないだとか、図書館に来られない、本が読めないと、そういったご意見のある中で我々としては、地域のイベントの出張読み聞かせ、そういった形でのアウトリーチ型での取組というのも一つ強化することができるんじゃないかということで掲げさせていただいた取組となっております。

二つ目、子どもの視点に立った読書活動の推進となっております。こちらも国で掲げてお

ります3本柱のうちの一つになっております。子どもたちの主体的な学びを支援する、あるいは子どもたちの意見をしっかり反映させていこうということで、子どもたちの意見をしっかり聞き取った上で、図書館としてどういった取組ができるかということを考えていくのも必要な視点なのかなということで、取組案ということで書かせていただいております。

最後、「目標5 地域団体等との協働による子どもの読書活動の活性化」というところになります。真ん中の囲みの文章表現の中に、図書館及び学校図書館職員に加えまして、「ボランティアの研修の充実により」という形で表現を追加させていただいております。

「次期計画の取組案」に書いてございますが、図書館ボランティア、ライブラリーパートナーという呼び方を我々はしておりますが、そういったライブラリーパートナーの研修と活躍の場の充実というのは、我々としてもさらに考えていくところがあるのかなと思っております。

二つ目といたしまして、書店との連携の推進ということで、今、国のほうでも図書館と地域の書店との連携について、いろいろワーキングが進められているところでございますが、文京区といたしましても、地域の書店とどういった連携ができるかというところを今後考えていければということで取組案を考えてございます。

方向性については、説明は以上となります。今回、方向性ということで取組案をお示しさせていただいておりますが、これをさらに肉づけ、充実させていただきましたものを、次回、第3回目で、さらに素案という形で盛り込んで、また皆様にお示しをできればと思っております。

説明は以上となります。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

それでは、ただいまの説明、提案を受けて、ご質問やご意見をお願いいたします。

お願いします。

○東田委員 中P連代表の東田と申します。よろしくお願いします。

この第4号の資料、赤字のところが現行計画からの変更ということですけど、次期計画の取組案のところは全部黒字で書いていますけど、これは全く新しい取組ということによろしいですか。

○猪岡幹事 はい。そのとおりです。

○東田委員 項目として増えたのが、恐らく目標の2のNo. 11、日本語を母語としない子どもの読書活動の推進かと思うんですけども、今、文京区内で日本語を母語としない子ども

さん、どれくらいいらっしゃるのかどうかというところを把握されているかどうか教えていただけますか。

○長谷川委員長　お願いします。

○中川幹事　学務課長の中川でございます。日本語を母語にしない、外国籍の方がどれくらいいるかという視点でのお話になるかと考えております。

報道等もされているところでありますが、外国籍の方が増えているという傾向はあるんですが、直近で、文京区立学校に小学校も、中学校も合わせて、令和5年度の5月の数字にはなりますけれども472人の外国籍の児童・生徒がいるという数字は、こちらのほうでも持っております。

○東田委員　ありがとうございます。

○長谷川委員長　よろしいでしょうか。

ちょっと今のことに関連してなんですけれども、図書館の多文化サービスというものの関連が非常に深いと思うんですけれども、文京区では、どの程度力を入れているというか、こういったことをしているかというのを、もしご説明いただけたら、触れていただけるとありがたいんですが。

○事務局（鈴木）　特に多文化サービスとして位置づけて大きく取り組んでいるのは、まだ言えませんが、例えば、読み聞かせの会で、英語を使った読み聞かせの会を複数の館で実施をしております。

それから、外国語の資料については、絵本から一般の書籍まで、様々な言語の資料をそろえるようにしているといったようなところがございます。

○長谷川委員長　ありがとうございます。地域によっては、例えば、中国の方が多い地域とか、何かブラジル系の方が多い地域とか、いろいろ特徴が、朝鮮、韓国系の方が多い地域とかというのがあって、何か、地域性を出したそういうサービスをしているというところもあると思うんですけれども、文京区のほうは、特にそういうことは地域センターのものはないんでしょうか。

○事務局（鈴木）　比較的、アジア圏からいらしている方が多いのという印象を持っております。ですので、外国の資料といいますと英語に偏りがちなんですけれども、意識的にアジアの言語のものも増やしていきたいと考えているところです。何分、出版の数ですとか、それから書店で扱っている数なども少ない状況がありますので、こういったものを選定して受け入れていくかというところは、日々工夫をしながらやっているというような状況でござ

ざいます。

○東田委員 相手方の国の言語の物をそろえるという活動なんですか。感覚的にはやさしい日本語にして、増やしていくという活動ではないかと思われるのですが。

○猪岡幹事 今のご質問のところで、まさにご指摘のとおりかなと思っておりまして、今、日本語をしゃべれないお子さんが増えているといったところで、そういった方々に対してやさしい日本語を学んでいただくという趣旨の中で、多読の充実・普及というところを掲げたところでございます。

ただ、その根底にあるのは多文化共生ということで、日本の子どもたちも外国籍の子どもたちも、みんなが一緒に過ごす、暮らすという、そういったところが根底にあるのかなと思っております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。図書館で、こういった多文化サービスという、やさしい日本語プラス母国の情報を欲しがっていたりとか、親御さんなんか母国語で読みたいとかというニーズもあるので、ちょっと英語に偏らず目を向けていただくと、教育の幅も広がるというか、そういうふうに感じております。ご検討いただけたらと思います。

○吉田幹事 では、ちょっと関連して、よろしいですか。

○長谷川委員長 はい。お願いします。

○吉田幹事 教育推進部長の吉田と申します。今回、図書館の話なんですけれども、教育委員会としては、今ご議論があったように、外国籍というか、日本語を母語としない児童・生徒というのも一定程度いるということで、今、その支援策として本区では、日本語指導支援員というような形で、学校からのそういった要請があった場合には、その言語ができるような方を支援員として派遣して、その子たちのサポートをしているということをずっとしております。

ただ、なかなか支援員を確保するというところにも課題があると認識しておりますので、来年度に向けてはさらに、今、本区ではいろいろな機関がありますので、中国関係ですとか、アジアの関係のそういった機関と連携をして、そのところで、日本語じゃない外国語のところから日本語を理解できるようなサービスですとか、そういったものもしっかりと取り組んでいこうというようなことを検討しておりまして、来年度中にはそういったこともやっていくということで、幅広くそういった児童・生徒に対しての支援というのも進めておりますし、さらに充実した取組をしていくというようなことを計画しております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

それでは、次の方、お願いいたします。

○小木委員 小木と申します。本当は、ほかに別途、申し上げたいことがあるんですけど、今の件に関して言うと、例えば、こういう席には外国籍の方の代表の保護者の方とかが今、出席していらっしゃると思うので、本当にそういう方が何にお困りでとか、どういうことを要望されているのか、図書館に、というのは、こういうところにも出席していただくということも考えてもいいのかなというふうに思いました。

以上です。

○長谷川委員長 ありがとうございます。今後のためのご意見ということで、よろしく願いします。

では、ほかにいかがでしょうか。

お願いします。

○大坪委員 認可保育園父母連の大坪です。資料4号の3ページ目、目標の4で、次期計画の取組案の2点目、子どもの視点に立った読書活動の推進というのを書いていただいていると思うんですけども、まだ案なので、具体的な話がどこまで進んでいるか、ちょっと定かではないですが、やはりさっきのアンケートを見ても、学年によって要望している内容は違うのかなというのが気になっているので、この子どもの視点に立った読書活動の推進といったときに、何歳から何歳ぐらいを対象にしているのか、どういうイメージなのかというところをお聞きしたいのが1点と、その下の目標5の取組案の1、図書館ボランティアライブラリーパートナーというふうに書いていただいているんですが、すみません。ちょっと私も勉強不足で、これがどういった方なのかというのがちょっと分からなかったので、ご説明いただけると助かります。

○長谷川委員長 お願いします。

○猪岡幹事 まず、一つ目のご質問で、子どもの視点に立った読書活動の推進ということで、対象年齢がどれくらいの方々かというところになりますが、我々としては特にその年齢を区切っておらず、今、我々で中高生と言っているのが10代というところまでを指しておりますので、10代の子どもたち、下は特に何歳からというのは求めなくて、10代の子どもたちまでに対して、しっかりとその子どもたちの意見を聞きながら、どういった図書館を利用したいとか、図書館を充実させていくという視点が必要なのかなと考えております。これを具体的にどういった形で計画に落とし込んでいくというのは、これからにはなるんですが、こういう視点は充実だということが必要だということで、記載をさせていただいてお

ります。

二つ目の図書館ボランティア、ライブラリーパートナーというところで、まず、これは図書館ごとにご登録をいただいております。各図書館ごとボランティアスタッフとして活動いただける方ということでご登録をいただきまして、今、文京区でいきますと大体70名から80名くらいの方が活動されているといったところとなっております。

どういったときに活躍しているかという、今、図書館のほうでも行事ということで、読み聞かせだとか、おはなし会、そういったところをやっておりまして、そういったところでご活躍をいただいているというような形となっております。

○大坪委員 これは希望すれば誰でもなれるものなんですか。

○猪岡幹事 基本的には、希望して登録いただければ、なれます。

○大坪委員 ありがとうございます。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

○猪岡幹事 ただ1点、追加をさせていただきますと、活躍の場というところを我々もしっかり考えていかなければいけないかなということで、今回、次期計画の取組案ということで活躍の場の充実ということで書かせていただいております。今お伝えしたのが、やはり、その読み聞かせだとか、おはなし会だけだと、先ほどいるボランティアの皆さんたちの活躍の場が、それほど広くはないのかなといったところで、よりどういった活躍の場に上げられるかというのを次期計画に向けて考えていければということで書かせていただいております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。私が以前、文京区の図書館をお伺いさせていただいたときに、布の絵本か、触る絵本なんかの作成もされていたり、あと、装飾というか飾りつけなんかもされていた様子なんですけど、大分それは前だったので、今はどんなような状況でしょうか。

○事務局（鈴木） 現在も、小石川図書館では、布の絵本を作る会というグループで活動していただいて、新しい布の絵本の作成や、ちょっと傷んだものの修繕などもやっていただいているという状況です。

○長谷川委員長 非常に楽しそうな本だったので、ぜひ、それも充実させていただけるのかなと思うんですけれども、ボランティアの方、そのときちょっと何か、割と少なくなっているというか、高齢化が進んでいるというようなことがあったと思うんですけど、問題点なんかはありますか。

○事務局（鈴木） 確かに長く活動されていますと、やはり、ベテランになっていかれると

いうことはございますので、新しい方に入っていただくということもまた必要かなというふうに思っています。

一方で、学生さんのボランティアもこの間増えておりますので、そういった方たちが子どもたちと楽しい時間を過ごすというところで、大変好評を得ているというようなこともありますので、様々な世代の方にそれぞれの経験などを生かして図書館のサービスに生かしていただければ大変ありがたいなというふうに思っております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。ぜひ、お願いいたします。

それでは、ほかにいかがでしょうか。

○小木委員 小木です。ちょっと具体的なアイデアをお伝えできたらなと思っています。1ページ、資料4号の1ページ目の1番目の目標に対する次期計画の取組案のところです。私は、長男が高校生で、次男が小学生というところなので、ちょうど中高生世代と小学生世代、どちらも実感があるんですけども、まず小学生の取組の拡充のところは、私もちょっと気になっていて、乳幼児期はちょっと手厚いけれどもというところがあるので、ここを掲げていただいてありがたいです。

具体的には、小学校でタブレットを配付していると思うんですが、あれをちょっと何かいのように利用できるのではないかなというふうに思います。何かもし、それで考えていらっしゃるものがあれば、もちろん教えていただきたいんですが、ご存じの方も多いと思うんですが、今、タブレットがすごく起動が遅いとかという問題があって、ただ、今度、取り替えるんだというようなことも通知をいただいているので、そのときを機に、ブックリストであったりとか、オーディオブックとか、そういったものが入れられるとか、そういったことを同時に推進されたらどうかなというふうにちょっと期待しています。

もう一つ、中高生世代に対する興味・関心の喚起というところでは、単なるブックリストとか本の紹介ではなくて、その本がその子にとって何の役に立つかみたいなことをやったり中高生になると意識すると思うんですね。この本を読むと自分はどんなふうになれるのかとか、自分の興味の何に効くのかみたいなところが必要かなというところで、もし可能であれば、中高生の方がやっぱりY o u T u b e rとかそういう方はよく見ているので、そのY o u T u b e rでも本を紹介するY o u T u b e rさんとかいるので、何々さんおすすめの本のリストで、それを読むとこういうことが分かるみたいなことであったり、あとは先のほうに書店との連携ということもあったので、その書店さんの書店員さんのおすすめの本みたいな形の、何かそういう人が見えるブックリストだと、ちょっとY o u T u b e 的な

感じで、興味を喚起できるかなというふうにアイデアがありましたので、お伝えいたします。

以上です。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

○猪岡幹事 ご意見ありがとうございます。まず一つ目で、タブレットを使った何か取組というところになりますが、先ほど目標の3番で、ご紹介をさせていただいたところになりますが、児童・生徒への電子書籍サービスID・パスワードの配布です。この後、実現できるかという調整はありますが、こういった形で子どもたちのタブレットの中で、電子書籍が読める環境ができたりとか、先ほどご提案あったとおり、いろんなオーディオブックが使える環境があるといいところにはなりますので、今後そういった取組ができるかどうかをしつかり検討してまいりたいと思っております。

二つ目で、中高生のアプローチというところで顔が見えたほうがいいというのは、私もまさにそうだと思っております。今、文京区の実践の中で、本郷図書館の実践の中で、地元の書店の店長がおすすめする本というような形で、館誌に載せたりしているんですね。そうすると、その地元の店長さんがおすすめする本は、どんな本かと特色が出てきたりして、さらにはそのお店に足を運んでみようというようなところにもつながってくるのかなと思っております。そういったちょっとしたきっかけではないんですけど、それでもやっぱり顔が見えるというのは、非常に重要なポイントかなと思いますので、今、いただきましたご意見なども踏まえながら、我々も中高生にこういったアプローチができるかというのを考えていきたいなと思います。

○小木委員 ありがとうございます。

○長谷川委員長 それでは、ほかにいかがでしょうか。

お願いします。

○石倉委員 石倉です。まず、ヤングアダルトという言葉の中・高生世代という言葉に置き換えていただいたことに関して、ヤングアダルトという言葉、出版社の人間はよく使うんですけども、実年齢の中高生の感覚、馴染みですとか、帰属意識というところと、乖離があるんじゃないかという気がずっとしておりました。また、ヤングアダルトという言葉に含まれるアダルトという言葉の本来の意味と、そこに付随するマイナスのイメージのギャップも気になっていたところがあるので、ここをこういうふうに変えていただくというのは、言葉の変更ですけども、非常に大きな変化につながるんじゃないかと思いました。

あと、日本語を母語としない子どもの読書活動の推進に関連してなんですけれども、この

項目に関しては、ブックスタート事業とも非常に深く関わってくるんじゃないかと思えます。ブックスタートで本を手渡すときに、日本語以外の言語を貼り込んで渡す、あるいは日本語以外の言語に訳したものをA4程度の紙に印刷して一緒に手渡している地域もあると聞きますので、もし文京区のほうで今、すでに取り組んでいらっしゃるものがあればそれをお聞きできたところと、あるいは今後、こういうことをやっていこうと考えている部分があればお聞かせください。もし今の段階で検討に含まれていなければ、11番の項目で検討に含めていただけたらありがたいと思いました。

それから、目標の2の「アクセシブルな資料の充実」というところで、参考にされたスウェーデンの図書館サービスについて、少しご説明いただけたらお願いいたします。

もう一つ。質問が多くてすみません。目標5の中の「書店との連携の推進」という部分で、具体的には次回お示しいただけるということですが、現時点でイメージとしてお聞かせいただけるものがあればお願いいたします。

以上です。

○猪岡幹事 ご意見ありがとうございます。まず一つ目のところで、表現の変更というところで、ほかの自治体でも、ヤングアダルトという言葉をやめて、ティーンズという言葉を使っている図書館もかなりあるところです。ヤングアダルトという言葉で敬遠してしまうというところもあるのかなと思っておりまして、今、委員からご指摘ありましたとおり、表現の変更ではあるんですが、我々への中高生のアプローチの仕方も変わってくるのかなと思っておりまして、図書館全体で考えていければなと思っております。

中高生の立ち位置を考えたときに、中高生というのは、児童に寄るのか、大人に寄るのかというところも結構議論としてありまして、児童のほうに寄り過ぎてしまうと、中高生が児童に含まれることに対してちょっと敬遠してしまうというところもありますので、大人のほうに含めたカテゴリーとか、そういったところも議論としてあるのかなと思いますので、中高生世代の在り方というところをしっかりと考えていければなと思っております。

二つ目の日本語を母語としない子どもの読書活動の推進というところになりますが、今委員からお話ありました、ブックスタートのときに、日本語以外のA4のペーパーを入れているというお話、ちょっと私も初めて伺ったところです。今、文京区でこういった取組をやっているかどうかというところになりますと、現時点ではこういった取組は特にやってはないので、委員からお話ありましたようなところが、ほかの自治体の状況を聞きながら取組を進めていければなと思っております。

今、ここで具体的に考えているところが何かというのが、今、お話にあったアクセシブルな資料、多読資料の充実・普及というところが一つそういったアプローチになるのかなとは思ってはいるんですが、まだ具体的な現時点での取組内容は定まっておきませんので、ほかの自治体の取組を見ながら進めていければなと思っております。

また、りんごの棚の設置というところになりまして、スウェーデンの図書館サービスを参考にと書いてありますが、りんごの棚というものの自体がスウェーデン発祥のものになっておりまして、文京区ですとLLブックという形で、比較的読みやすい本があります。大人でも子どもでも、なかなか本に取っかかりがしづらいいといったときに、LLブックという形で比較的簡易な形で書かれた、絵も充実して、子どもたちが手に取りやすい、大人でも手に取りやすい、本が苦手な方が手に取りやすいといった本をご紹介します書棚に並べるとか、あるいは大活字本という形で普通よりもちょっと字の大きな本がありまして、小さい文字が読みづらい方に対してのアプローチということで、そういう本を多く並べているというのは今、真砂中央図書館でもやっているところがございますが、それがなかなか知られていないというようなところもありますので、りんごの棚というような表現を使って、各図書館でそういった場所を整備していく、こういった資料があるんですよということを皆さんにお伝えをしていく、そういった取組が必要なんではないかということで、今回、取組の中で、書かせていただいたところでございます。

また、最後、書店との連携の推進になりますが、こちらも具体的な取組というのが、まだ現時点ではなかなかできていないところです。我々の課題ということで、出版社との連携というのは、結構できているのかなと思っております。いろいろなイベントで出版社の方に来ていただいて講演をしていただくとか、出版社の原画のほうを展示したりとか、そういう形で出版業界とは連携ができてはいるんですが、書店と何か連携が具体的にできているかというところが、実際なかなかできていないというところを課題として捉えております。先ほどご紹介をしました本郷図書館だと、書店の店長のおすすめ本を記事として載せた取組を始めたというところをお伝えしましたが、そういった形でも少しでも、書店と連携の小さなことから始めていければなと思っております。

ただ、この部分については、これから書店の皆さんと、どういった取組ができるかというところも意見交換しながら、考えていければな思っているところでございます。

○長谷川委員長 よろしいでしょうか。

ありがとうございます。ちょっと、今のところに付随してなんですけれども、そのスウェ

ーデンの図書館サービスを参考にということで、LLブックの紹介があって、LLブックは写真とか、絵記号なんかもたくさん出てきて、学習障害の方にも非常に有効な本ということで、点数は少ないみたいなんですけど、充実させていただけるといいのかなというふうに感じました。

そこに読書補助具というのが出てきているんです。これは、何を指していращやるか、お願いします。

○猪岡幹事 例えば、リーディングトラッカーというもので、本を読むときに上と下に文字があると、どこを読んでいるか、それが読みづらいという方がいますので、上と下の文字を隠して、自分が読むところだけが見えるような形にするリーディングトラッカーというのがあるんですけど、そういった様々な本を読むための道具というのをご紹介していくというのにも必要なのかなということで書いております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

それでは、ほかにいかがでしょうか。

○猪岡幹事 すみません。先ほどのブックスタートのところで、私の認識もちょっと違うところがあったので、係長のほうから説明をさせていただきます。

○事務局（鈴木） ブックスタートの多言語でのご案内ですけれども、私どもが図書館で独自で作っているものではないんですけれども、ブックスタートの趣旨などについて外国語で記されたペーパーと一緒に同封させていただく取組は現在も行っております。英語やタガログ語など、複数の言語に対応するような形で用意をしております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

では、お願いします。

○三井委員 三井です。実は、私は、図書館ボランティアで、ライブラリーパートナーをやっているんですけれども、水道端図書館で月に1回子どもたちに絵本の読み聞かせとか、あと、ブラックライトパネルシアターとか、文京区の古い昔話を影絵にしたものを独自で作ったものをみんなで……。

すみません。水道端図書館の上でそれを皆さんに披露しています。もう十四、五年続いているんですが、月に1回そこでやらせていただける場所を提供していただいているという感じで、我々もやっているんですけれども、すごく図書館の方も協力的で、チラシを作って配布してくださったり、大体コンスタントに親御さん、大体幼稚園ぐらいのお子さんが来るんですけど、大体30人ぐらいは来ていただいているかなと思います。

あと、具体的にというか、それは例なんですけど、ちょっとそのところに、図書館ボランティア、次期計画の取組案の目標5の最後のところに、研修と活躍の場の充実というのがありますが、活躍の場というふうに言われると、もう実は、もうそこで月第2土曜日という決まりがあるだけ、決まっているというか、それだけなので、もうちょっと我々は自分たちでちょっと明化小学校さんから呼ばれて、来てくださいといわれて行ったりとか、そういうふうな活動もしているんですけども、何かそういう各学校から、もうちょっとこういうのをやってほしいというのが来れば、こっちも出張で行ったりとか、そういうこともできるしというのもあって、何というのでしょうか、活躍の場の充実というので、いろいろボランティア、ライブラリーパートナーの方たちが持っている特性を生かして、こういうことをしたらいいとかいうのをお互いに共有できたらいいかなと思います。

以上です。

○長谷川委員長　ありがとうございます。

○猪岡幹事　ご意見ありがとうございます。今、委員からお話がありましており、皆さん特技というところが、ここの部分に長けているというようなところを皆さんお持ちだと思っております。特に、読み聞かせというところを私も聞いた際には、すごい皆さん技量を持っていて、様々な場面で活躍もできるのかなと思っておりますし、そのネットワーク自体も皆さんお持ちだということがあると思っております。そういったところを皆さんと意見交換しながら、どういった形で拡充できるかというのを、我々も考えていければなと思っております。

ライブラリーパートナーさん、先ほど人数のほうお伝えしたんですが、活動できている方もいれば、できていない方もいらっしゃるというところで、提供できる活躍する場というの、いろんな幅のものがあってもいいのかなと思っておりますので、そういった視点も踏まえながら、また考えていければなと思っております。

○三井委員　ありがとうございます。

○長谷川委員長　それでは、ほかにいかがでしょうか。

ぜひ、まだご発言されていない方も何かありましたらお願いします。

特に皆さんのほうから、ないでしょうか。

○三井委員　三井です。ちょっと先ほどのアンケートの結果のところ、ちょっと思ったことがありますけど、高校2年生のアンケートに関しては、QRコードを読み込んで、大体28%ぐらいの人が回答してくれている中で、本が嫌いとかいう割合は、あまり読まないとい

う割合がこれだけ高いということは、そもそももう答える気がない人はあまりアンケートをもらった時点で、本にあまり興味がない人たちなのかなと思っているので、多分、これよりももうちょっと本は皆さん読んでいないというパーセンテージになるのかなと思いました。

以上です。

○長谷川委員長 はい、お願いします。

○東田委員 東田です。資料第2号の保護者アンケートのところで先ほど、幹事さんのほうから、回答率が37.4%というふうにお聞きしたんですけども、今言われたような、残りの6割の方というのは、どういうふうなものだと、通常アンケートで大体4割の回答があると、当然、物すごくいい回答率なんですけど、じゃあ、残り6割の人たちをどういうふうに評価するかというところを、もしよろしければ教えていただけますか。

○猪岡幹事 今、三井委員からお話があったところがあるのかなと思ってます。なかなか分析は難しいのですが、ご回答いただける方というのは、一定程度図書館に興味を持っている方とか、読書に一定、関心がある方というところが、回答する割合としては高くなるので、傾向としては、回答された方は、一定読書とか図書館とか、あるいは行政の取組に対して関心を持っている方なのかなと。裏を返すと、回答されていない方々については、本や、図書館や、行政に対して、関心をお持ちではない方というところがどうしても割合として高くなってしまふのかなと思っております。

○長谷川委員長 よろしいでしょうか。

では、ほかにいかがでしょうか。

はい、お願いします。

○吉羽委員 柳町幼稚園の吉羽と申します。

ちょっと突拍子もない意見かもしれないんですけど、この幼稚園とか保育園のアンケートのご家庭の回答を見ると、読み聞かせはほぼ毎日しているという結果があって、だけど図書館に行かない理由というのが、やはり遠かったりとか、曜日や時間が合わないとか、時間がないというような回答が多いので、家では読み聞かせている。だから、多分、買っている。家で買って読ませているということなのかなというふうに思うんですけど、先ほどのライブラリーパートナーさんの活躍の場が少ないというところで、例えば、ちょっと支援が必要なお子さんなんか、やっぱり図書館に行きづらいというような事情もあったり、乳幼児さんだったら、やっぱり連れて行くのがちょっと大変だったりというような状況を考えたり

すると、ライブラリーパートナーさんが例えば、ウーバーじゃないけど、本を届けに行って、ちょっと読み聞かせしてあげてというような、そういう関係みたいなものを作っていくと、今度、図書館に来てねというと、親子で行くようなことがあるといいなという希望的な観測の意見です。

以上です。

○長谷川委員長 ありがとうございます。いかがでしょうか。

○猪岡幹事 ご意見ありがとうございます。先ほどアンケートの分析結果からお伝えしたとおり、本を読めない理由としては、忙しいとか、時間がないというところの分析があるので、いかにその方々に負担なく読書に触れてもらうかという視点は必要なのかなと思っております。

次期計画の中でも、出張読み聞かせ会とか、アウトリーチ型の何か施策を考えていく必要があるとお伝えをしたのも、何かそういうようなところを図書館で待つだけではなくて、そういった方々に寄り添っていくという視点も必要なかなと思っております。それが、どういう取組ができるかというところは、また我々図書館の中でも考えるとともに、他のライブラリーパートナーさんたちとも、どういう取組が今後充実できるかというところも意見交換しながら考えていければなと思っておりますので、委員からいただいたその視点は重要だと思っておりますので、そういったところを捉えながら考えていければと思っております。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

お願いします。

○小木委員 小木です。今、突拍子もない意見でと言ってくださったので、私も実は考えていたんですけど、紙芝居が昔あったというのを見たことがあって、紙芝居屋さんみたいなものが来て、近所に、そこに子どもたちが集まって聞くみたいな。それを復活させるみたいな、土日とかに、図書ボランティアさんが二人とか三人とかで行って、紙芝居やるよみたいな感じとかも取組ができれば、すごい何か文京区で紙芝居復活させるみたいなね、とても話題にもなるし、すごいすてきなんじゃないかなと思ったりしました。でも、突拍子もなかったので、私もちょっとさっき言えなくて、ありがとうございます。そんな意見でした。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

○猪岡幹事 ご意見ありがとうございます。我々のほうのやっている取組の中で、紙芝居ではないんですが、大型絵本という形でそれを保育園とか、幼稚園とか、子育て支援施設のほ

うに職員が持って行って、それを読み聞かせするだとか、あるいはイベントのほうにも行ったりもしております。

例えば、最近ありましたのは、目白台運動公園のイベントで、そこで青空読み聞かせみたいな形でやったりとか、そういうような取組もやっておりますので、そういうものをまた広げていけるような形で考えていければと思っております。

○事務局（鈴木） 昨年の秋ですけれども、千石図書館が工事の関係で少し長い間お休みをさせていただきました。そのときに、やはり何もしないのはということもありまして、近隣の公園のほうに職員が出かけていきまして、そこで紙芝居の実演というようなこともいたしました。

ちなみに文京区では、古くから紙芝居を作られている出版社さんもございますし、そういった意味では、非常にたくさんの資源を持っているというところはあるのかなというふうに思っております。

○小木委員 公園がやっぱりいいんじゃないかなと思いました。

ありがとうございます。

○長谷川委員長 ありがとうございます。

それでは、ほかにいかがでしょうか。

お願いします。

○小池委員 小池でございます。学校という視点で少し思ったことがあるので、発言させていただきます。目標3の家庭・地域・学校・関係機関における子どもの読書活動の整備と読書活動の充実というところの枠組みのところでは、ここは、前回から変わっていないというところだと思うんですけれども、一番下のところ、「学校図書館については、図書館との連携を図りつつ、「読書センター」「学習・情報センター」としての機能の向上を図ります。」というふうな記述になっておりますけれども、最近ですと、鍵括弧のくくりは、読書センター、学習センター、情報センターという形で語られることが多くなっているんじゃないかなという気がしています。ですので、もし可能であれば、そういう表記にしていって、学校図書館の機能がその三本柱であるというところを明記していくというのがいいんじゃないかなというのを思ったのが1点でございます。

2点目は、その下の次期計画の取組というところの、学校図書館への支援の充実に向けた取組ということで、これは感想ですが、大変ありがたいなというふうに思っています。学校図書館支援委員の方々は、本当に学校でよく精力的に取り組んでいただいています。文京区

においては、先ほど週4日、4時間ということでご勤務いただいているんですけれども、それだけ来ていただいているので、いわゆる図書館の環境整備だけではなく、子どもたちへの読み聞かせですとか、調べ学習の支援というところにも力を注げるというふうなことを伺っておりますので、ぜひこちらは現状をぜひ維持していただくと同時に、もし可能であれば、さらに充実していただけるとありがたいというのが感想でございます。

以上です。

○長谷川委員長　ありがとうございます。

○猪岡幹事　目標3のご指摘ありがとうございます。最近の表現のところを、もう一度我々のほうで確認をさせていただきまして、最新化のほうをさせていただければと思っております。

また、学校図書館の支援の充実に向けた取組というところでも、これまでも学校のほうから高い評価をいただいているところでございます。こういった形で充実できるかというところが、これから学校のほうとも調整が必要になってくる場面もあるかなと思いますので、それらも踏まえながら、こういった形に実現できるかというのを検討してまいりたいと思います。

○長谷川委員長　ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、そろそろ時間になりますので、本日の議題は、以上となります。

○長谷川委員長　それでは、そのほか何かありますでしょうか。

よろしいでしょうか。

(なし)

○長谷川委員長　よろしければ、本日の会議はこれで閉会といたします。

皆様、お疲れさまでした。ありがとうございました。